記念講演「能登の国　一三〇〇年」

講師　西川　郷史　氏
（西勝寺住職・石川県埋蔵文化財団センター評議員）

◇はじめに　能登という言葉が初めて出てくるのは、和銅六（七一三）年です。奈良の都から、「越前國登能郡翼倚（えちぜんのくにのとのこおりよき）…庸米六斗」と、税の徴収を記した木簡が出土しております。翼倚（よき）というのは、今の羽咋の余喜小学校のあるあたりです。

その後『続日本紀』巻八で、養老二（七一八）年五月、「乙未（二日）割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國」とあります。つまり、七一八年五月二日に越前国の、羽咋・能登・鳳至・珠洲の四つの郡を割いてはじめて能登国を設置したというのです。したがって来年二〇一八年は、能登国ができてから一三〇〇年という記念すべき年となるわけです。そこで、本日はその能登の民俗や歴史、文化の一端を、ご紹介したいと思います。

◇校歌　能登の豊かな自然や美しい景観は能登各地の校歌でも表されています。「いろくず群れいる珠洲の海原」は、鴻巣盛広が作詞した飯田高校の校歌の一節です。「いろくず」は、古語で、のちに「うろこ」になります。キラキラ輝く魚が沢山いる豊かな海が表されています。その他にも佐藤春夫が作詞した羽咋工業高校の校歌をはじめ、折口信夫、平井康三郎、井上靖等、多くの有名な作家によって能登の風土が校歌に詠われています。まず、身近なその地域の校歌から、能登の素晴らしさを味わうのもよいのではないかと思われます。

◇泰澄大師　今日、五月十七日に関わりのある泰澄大師のことをお話しします。泰澄大師は、奈良時代に北陸で活躍した僧です。七一七年には白山を開き、能登でも多くの山々を開いたといわれています。その大師の歌として知られているのに「恋しくば尋ねても見よ能く登る一宮の奥の社え」があります。泰澄が伊勢神社を訪ねて、神にお会いしたいと願いました。すると夢のお告げで、私（伊勢の神）に会いたいのだったら、能登の一宮（気多大社）の奥宮を尋ねなさい、そこに私がいます。と告げたというのです。伊勢と気多は同体だと考えられていた時期があり、「能く登る」は能登の枕詞でした。

泰澄大師は能登の古代を支配していた雨宮、小田中、蝦夷穴古墳などに祭られた為政者たちの次の時代の思想的基盤となった仏教を広めた、その象徴の僧ともとも考えられ「越の大徳」とも呼ばれていました、泰澄伝承は山や海辺の重要な地点に残っています。泰澄の後を継いだ石動山の僧たちによって、五月八日には嶽（高洲山）の山開き、十二日には高屋刀祢、そして、今日十七日には宇出津へと、能登各地を廻って祭事・祈祷を行っていました。宇出津へはドウブネに乗り法螺貝を吹いて上陸したと上田家文書にあります。

◇能登国三十三観音巡礼道　観音菩薩が三十三の姿で現れ人々を救うということから、三十三観音巡礼が行われていました。平安期の『梁塵秘抄』に、山伏たちが珠洲の岬を修行していた様子が歌われていることから知られるように、平安期にはすでに能登に札所の元ができていました。行者の修行拠点地の堂には不滅の火を灯し、それは灯台の役割も果たしていたのです。江戸の元禄期には再編成されたと考えられ、「能登国三十三観音巡礼札所」は、第一番が穴水の明泉寺で、能登島・崎山半島・七尾・邑知潟東往来・羽咋・西往来・田鶴浜・中島・富来・門前・輪島・町野の岩倉寺（第三十二番）を巡って、珠洲三崎高勝寺を結願札所とする一国巡礼でした。ところが慶応四（一八六八）年の神仏判然令から明治五（一八七二）年の修験道廃止令に至る修験・山岳宗教に対する政策によって、有力山岳寺院は瓦解し、神社に祀られていた多くの本地仏は、村堂や近くの寺院に移されました。

◇『梁塵秘抄』　後白河法皇が治承年間（一一八〇年前後）まとめた『梁塵秘抄』の僧歌に「我らが修行に出でし時、珠洲の岬をかい廻り、打ち廻り、振り捨てて、単身越路の旅に出でて、…」と、能登のことが詠まれています。今様といい、筑前今様や和讃に、当時の音曲を偲ぶことができます。

◇能登十二薬師・能登十七作仏薬師

仏教の時代区分は正法、像法、末法期に分けられ、奈良から平安前期（一〇五二年）までが像法期にあたります。その時の主仏は薬師仏でした。薬師の本願数は十二なので、能登各地にある薬師仏から代表的な能登十二薬師が選ばれていました。これを初めて記しているのは、安永五（一七七七）年の『能登名跡志』です。南から七尾和倉の「湯の薬師」、七尾中島の「熊木薬師」、高浜の「高爪薬師」、穴水の「甲山薬師」、それに町野、輪島、珠洲の「白滝薬師」「宗末薬師」です。現在不明のものもあり、巡礼がどのように行われていたかは不明です。

同じように、能登十七作仏薬師が『能登名跡志』に載っています。旧珠洲郡九、鳳至郡六、鹿島・羽咋郡各一の十七薬師です。

◇聖徳太子　十七の数で名高いのは聖徳太子が制定した十七条憲法でしょう。満数十を、人間の能力ではたどり着けない完璧な世界とすれば、人間が求めうる最高の数が、奇数の「九」と偶数の「八」で、これを足した「十七」条の憲法を定められました。そこには、第一条に「和らかなるもって貴しとし」とあるとおり、仲良くすることが最も尊いことで、そのためには第二条に、三宝（仏・法・僧＝仏・仏の教え・僧）を重んじなさいとあります。それまでの神仙的世界から仏教中心の国にしたいと考えられ、その理想が十七条でした。